

課程博士の学位授与申請に係わる審査報告書

学 籍 番 号 13DC1605
氏 名 (本 籍) 王 丁 (中国)
学 位 の 種 類 博士 (中国研究)
報 告 番 号 甲 第 117 号
学位授与年月日 2021 (令和 3) 年 3 月 20 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
論 文 題 目 刘泽华与中国政治思想史研究

審 査 委 員
主 査 松 岡 正 子
副 査 金 湛
副 査 加 治 宏 基
副 査 聶 莉 莉
副 査 周 星



2021 (令和 3) 年 2 月 15 日
愛知大学大学院中国研究科

審査の結果の要旨

本学中国研究科委員会の決定に基づいて、王丁より提出された論文博士の学位授与申請書および参考関連論文等関係資料により、2020年10月29日（木）に予備審査を行った。「大学院博士の学位授与に関する内規」第7条の定めにより、以下の2項目について、審査委員の意見交換を行った。

(1) 学位申請論文の予備審査および履歴事項、研究歴、業績目録について、十分評価できるという結論に至った。

(2) 外国語についての試問は不要であるという結論に至った。

予備審査の結果、博士學位論文の基本的要件を満たしており、学位授与申請の受理を可とし、本審査への移行を可とする。

2021年1月29日10:00~12:00、名古屋校舎本館M406教室にて（出席者：松岡、加治、金）、遠隔教学システムを使って（周星、聶）、学位申請論文の本審査を順調に行った。

まず、王丁より、学位申請論文の趣旨、問題意識、先行研究、研究目的、キーワード、依拠した資料・データ及び論文の構成、本研究の斬新性と問題点などについて、陳述がなされた。次に、審査委員による口頭試問に移り、質疑応答を行った。すべての質問に対し、王丁より回答や説明がなされ、それらの答弁はいずれも審査委員全員を概ね納得させるものであった。

口頭試問が終了し、王丁が退席した後、引き続き審査委員会において議論を重ね、以下の結論に至った。

王丁の論文博士學位申請論文は、『劉澤華与中国政治思想史研究』と題した、当代中国の歴史学における劉澤華学派を全面的、総合的に研究し、このテーマ領域の研究の新境地を開こうとしたものである。王丁論文は当代中国の「歴史学史」研究の最新の成果といえる。

当代中国を代表する最も影響力のある歴史学者の一人、劉澤華は中国政治思想史という専門分野において、「王権主義」、「王権が社会を支配する」などの課題や論断を提唱し、それらを中国の歴史や社会を解釈・分析する枠組みにまで発展させ、中国当代の歴史学に多大な貢献を果たした。

劉澤華が中国政治思想史を専門や研究方向として選んだ理由は、歴史学の空白を埋めようとするのみならず、「文革」及び「文革史学」を反省し、中国の国情を解析する時代的なニーズに応えようとしたためでもある。1970年代末期から、劉澤華は積極的に「文革研究」に関わり、「文革史学」を反省・批判するうちに、中国政治思想史という学問の立場に基づいて、著名な「王権主義」理論に辿りついたのである。劉澤華の研究に共感を持つ弟子や同僚の学者たちは、さらに「王権主義」

に関する諸問題の研究を深化させて、劉澤華をはじめとする学派を事実上、形成した。この学派は、劉澤華の政治思想史研究における中核的なキーワード＝「王権主義」を共有しているため、「王権主義学派」とも呼ばれている。当代中国の歴史学界において、数少ない学派の一つとして国内外からの注目を集める中、王丁論文は、劉澤華学派研究の集大成ともいえる水準に達している。

王丁論文のメリットとしては、以下の幾つかが挙げられる。

一つ目は、資料学・史料学の準備が十分に行われたことである。「劉澤華生平年表」、「劉澤華著作目録」、「関於劉澤華学派的研究成果」といった本論文の三つの付録は、劉澤華および劉澤華学派を研究するために必要不可欠な資料・史料を可能なかぎり網羅したものとなっており、本研究の基礎である。これらの資料・史料を踏まえた参考文献も充実している。このような地味な資料学の作業を通して、王丁論文は従来の劉澤華及び劉澤華学派に関する研究を超え、このテーマ領域の研究をレベルアップさせたといえる。

二つ目は、ライフヒストリーの手法を使って、劉澤華の生涯を「文革」までの経歴、「文革時代」の個人的経験や境遇、「文革」終息後の反省や批判的な研究活動といった三段階に分けて、それぞれ時代の状況や問題をあぶりだし、明白に整理した。そしてそれらを踏まえて、劉澤華の「文革」研究や「文革史学」への反省、および劉澤華の政治思想史研究や劉澤華学派の時代的な背景を明らかにした点にある。学術的思想・理念と社会・時代との相互関係を踏まえて全体論的に、劉澤華への理解にアプローチしようと試みたといえる。

三つ目は、劉澤華学派の形成背景や意義及びその理論化プロセスを解明しようとする問題意識を持ち、先行研究を十分にふまえたうえで、劉澤華の政治思想史研究、とりわけ劉澤華の「王権主義」理論を体系的に整理・分析する試みを行ったことである。

まず、劉澤華の研究及びその理論はマルクス主義、「五四運動」時期の思想や王亜南『中国官僚政治研究』などの影響を一部受けたが、あくまでも自らの研究により「王権主義」を発見・総括したことを指摘した。劉澤華は古代中国の君主制帝国の体制のもと、最初の封建地主や小作農などすべてが政治支配や政治コントロールの産物であったという歴史的事実を重視し、経済的基礎が上層構造を決めるマルクス主義の原理に反していることを発見し、古代中国における政治権力の重要性を明らかにし、「王権が社会を支配する」と論断した。次に、劉澤華の政治思想史研究の批判性を評価した。劉澤華は君主専制主義が中国政治思想史における中核的な位置づけにあり、また中国の伝統文化の主軸にもなったことを認識し、それらを「王権主義」という概念でまとめた。第三に、劉澤華の「王権主義」理論は豊かで複雑な内容を持ち、複数のレベルにわたって成り立っていることやその言説の全体性及び絶対性を指摘した。すなわち、基礎的な社会関係レベル、秩序や社会運営のメカニズムのレベル、社会のイデオロギー・思想・観念レベルなど、すべてのレベルにまで王権主義が浸透しており、劉澤華から見れば、古代中国社会のすべては「王権」に支配されている、とする。さらに、このような「王権主義」理論は、一定の自己完成度を達成し、当代中国の歴史学界に認知されつつあることの意味を論じた。つまり、この理論は中国政治思想史研究のパラダイム転換につながって、中国伝統社会の本質的な特徴を明らかにし、中国政治思想史という分野に新たな解釈力のある歴史観を提供し、その発展に大きな貢献を成すものであるといえる。

四つ目、中国政治思想史の研究における劉澤華のその他の諸研究にも注目し、それらの研究が異なる角度から「王権主義」理論を支えて、補完的な役割を担っていることを指摘した。すなわち、中国の伝統的な政治哲学の領域において、劉澤華は「天」「道」「聖」「王」の合一性を論じたこと、また、「政治文化」という西洋の概念を導入し、中国の伝統的な政治思想や政治文化に内在している「王権主義」の理念を明らかにしたこと、矛盾・ジレンマの中で歴史や政治思想史を語る研究実践も積み重ねて、古代中国の思想家たちの思考様式を明らかにしたことなど、劉澤華の学術的な貢献をまとめた。さらに劉澤華及びその学派の史学研究方法論のポイントを整理した。それは、歴史学を本位としながら、その他の学問分野の視点や方法の使用を排辞せずにそれらを吸収すること、マルクス主義基本原理の解釈力を信じながらも、社会形態の階層分析方法や「階級—共同体」分析法、思想と社会の関係性を含む全体研究方法などの修正にも取り組んだ。

要するに、王丁論文は、劉澤華およびその学派の「王権主義」理論の学問的価値や現実的な意義を明らかにし、それらを体系的にとらえようとした。即ち、劉澤華の中国政治思想史学科への貢献、劉澤華をはじめとする中国政治思想史研究領域における「王権主義」学派の学術的な特徴や貢献、さらに、国内外の反響などを体系的に研究したものといえる。劉澤華と劉澤華学派の学者たちは中国大陸の「新儒家」や国学・国粹発揚派との学術論争によって、現在、中国の文化保守主義をけん制する最も重要な存在になっている。また、劉澤華の理論及びその学派は、中国の伝統的な政治思想の現代社会における転換問題について、深く模索したことによって、古代の政治理念から現代の政治理念へ、更に、君主専制主義から民主主義へ、臣民意識から公民意識へ、聖人崇拜観念から自由観念への転換の方向性を明らかにし、その転換を促進させる働きを有するものとして、現代中国社会にとって、非常に重要な時代的価値を持っていることを王丁論文は指摘したのである。

王丁論文の問題点として以下のいくつかが指摘される。

一つ目、研究対象の定義に曖昧さがあること。劉澤華と劉澤華学派の関係性、劉と弟子たちの関係性、劉澤華学派と中国政治思想史研究におけるその他の学者たちとの関係性などがはっきりされていないので、劉澤華及び劉澤華学派の当代中国の歴史学における位置づけも、不透明なところにとどまっている。

二つ目、劉澤華の研究方法の一つである「思想・観念と社会との関係性を含む全体的研究方法」をそのまま、本論文の研究方法として位置づけする理由についての説明が不十分である。研究者として、研究対象の方法を踏襲する場合、どのような根拠があるのか、どのような問題が生じかねないかなどについて、熟慮する必要がある。研究者の本研究の方法論はより講じられるべきである。

三つ目、王丁論文は、劉澤華学派の弱点を幾つか指摘したものの、資料に基づく理論的分析がやや弱く、さらに深く分析する余地があると思われる。例えば、中国伝統社会への強い批判意識は研究結論にも影響する可能性が払拭できないことなどが指摘されるべきである。

四つ目、「王権主義」に関して、その他の学者の研究にほとんど触れていない。劉澤華の核心理論

の詳細な解説はなされていたが、比較の対象が明示されていない。

五つ目、論述の重複を含め、章立てはより論理的に立てられるべきである。

以上を踏まえて、審査委員会においては、全員一致で王丁論文は一部の問題点が認められるものの、全体として愛知大学大学院の博士学院論文諸規定に定められた諸要件を満たしているという結論に至った。

以 上